

3年ぶりとなる「ひやくまん穀プレゼンツ第34回ツール・ド・のと400」（同実行委、北國新聞社主催）は17日、3日間の日程で始まった。全国のサイクリング愛好者約600人が陽光に輝く日本海を背景に次々と駆け抜け、銀輪の連なる光景が徐々に初秋の能登路に広がった。

【41面に関連記事】



潮風に吹かれながら千里浜なぎさドライブウェイを走る出場者＝羽咋市千里浜町

3年ぶり「ツール・ド・のと」

能登路 駆ける



600人参加

大会は午前8時、金沢港クルーズターミナルを出発して幕を開けた。3日間で能登半島を一周する約420キロのコース「チャンピオンコース」の参加者らが、初日のゴールとなる輪島市のマリントアウンを指し、約140キロを快走した。

大会には30都道府県からエントリーがあり、出場者は潮風が吹く千里浜なぎさドライブウェイなどを走り抜け、強い日差しに汗を滴らせながら、能登の美しい風景を楽しんだ。国際的自転車ロードレースチーム「EFエデュケーション-NIPPONデヴェロップメントチーム」の織田聖選手も参加した。

午前7時半から行われた開会式では、久保幸男北國新聞社取締役事業開発担当、村山卓金沢市長、伊藤透金沢医科大学病院長があい

金沢港—輪島 初日は140^{キロ}



金沢港クルーズターミナルから一斉にスタートする出場者

県内、全11地点で真夏日

17日の石川県内は高気圧に覆われて晴れとなり、志賀で33・8度、金沢で33・6度と県内全11観測地点で真夏日となった。県内の各消防本部・消防局によると、金沢市の10歳未満の男児と羽咋市の80代男性の2人が熱中症の疑いで搬送された。いずれも軽症とみられる。

さつした。18日は七尾市までの約160キロ、最終日の19日はゴールの金沢市までの約120キロを巡る。大会は、1906（明治39）年に北國新聞社が主催した県内初の自転車ロードレースを源流とする。ツール・ド・のとは県自転車競技連盟、県サイクリング協会が共催した。